

## 0 はじめに

本稿は現代語における副詞「なかなか」の意味用法・使用条件の分析記述を行なうものである（通時論的な考察には立ち回らない）。

現代語の副詞「なかなか」について、二種類の用法を認めることがしばしば行われる。本稿は、典型的に二種類の用法を認めるが、同時に、両用法の間の連続性、中間的な領域の存在にも十分に着目する立場に立つ。<sup>\*1)</sup>

現代語での「なかなか」の意味用法に関しては、森田良行氏による優れた記述が既にある（森田（1977））。本稿も多くの点で森田氏の記述を踏まえたものであるが、「なかなか」の基本的な意味の捉え方、および、具体的な使用条件の派生に関して筆者の考えを示し、特に、程度を限定する用法（本稿で言うB用法）における述語との共起のあり方に関して、記述と原理的な説明を試み、特に尺度の無標方向性との関連に言及するものである。?は不自然さを表し、自然度の判断は筆者自身の内省による。

## 1 「なかなか」の二つの用法

先に述べた「なかなか」に典型的に認められる二つの用法とは、次のようなものである。以下では便宜上それぞれA用法、B用法と呼ぶことにする。

### (1) 「なかなか」のA用法

典型的に否定文<sup>\*2)</sup>において用いられ、「なかなかP' ない」の形で、期待される事象P' の成立を容易に見ることができないことを表す。

### (2) 「なかなか」のB用法

広義の程度性<sup>\*3)</sup>を有する述語Pを限定して、見くびれない（軽く評価して済ませられない）程度にPであるということを表す。

以下に典型的なA用法の例をあげる。

- (3) 待っているのになかなか来ない。
- (4) 年末にひいた風邪がなかなか治らない。
- (5) 遷都のみならず、首都機能の分散がなかなか実現しないのには、おもに2つの理由があげられる。（朝日88.1.4）

次に典型的なB用法の例をあげる。<sup>\*4)</sup>

- (6) そうそう、その調子。なかなか素質があるよ。（筒井）

(7) なかなか興味深い経験だった。

(8) こう見えてなかなか頭はいいのだよ。(宮尾)

さて、A用法において、(1)でいうP' になりうるのは動詞述語に限り、形容詞述語などは困難である(×なかなか赤くない、×なかなか完璧でない、など)。P' になる動詞としては「来る」のような動作性動詞の他、「ある、いる」のような状態性の動詞や可能動詞なども用いられる場合がある。

(9) 「娘が適齢期だけどなかなか縁がなくて…」と気をもんでおられる親御さんも多いのでは…。(新聞広告)

(10) ロリータショップ、ロリータサロン、そんな言葉から、お店を想像できる人は、なかなかいないのではないかと思います。(内田)

(11) 始めようと思うのだがなかなかきっかけが掴めない。

(12) この品物はなかなか売れない。

(13) あの雰囲気は、他所者にはなかなかなじめない。

A用法では、P' は基本的には、未成立の状態から成立した状態への転化が考えられるような動詞述語でなければならない。一方、B用法では、Pは、その度合の大きさを計れるような述語でなければならない。ところが、A用法のP' として適格な述語が、また、「P' ナイ」全体としてはB用法のPとして適格であるということがありうる。

例えば、(14)-(16)の述語はいずれも「～ナイ」全体で程度性があると考えれば、B用法の解釈が可能である。(14)は通常「侮れない」状態から「侮れた」状態への転化という見方がなされないことからA用法とは解し難いが、(15)、(16)は、文脈を度外視すれば、両様に解しうる。(13)のような例もB用法に解する余地はあるかもしれない。あるいは両用法の連続線上にある例とも見られる。

(14) 彼はあれでなかなか侮れない(ところがある)。

(15) この子はなかなか言う事を聞かない。

(16) 先生はレッスンを始めた。なかなか肩の凝らない一時間だった。(イッセー)

既に述べたようにA用法とB用法の間には一種の連続性を認めなければならない。「期待される事柄が容易に成立しない」ということと、「ある事柄の成立の困難度が、軽く評価出来ない程度に高い」ということの間には相通じるものがあるから、B用法において、Pが事態成立の困難度にかかわる述語である場合にはA用法に近づくことになる。

例えば次の3例のうち、述語が否定形式である(17)はA用法の例であり、(18)、(19)はB用法の例であると決めつけることも可能ではあるが、むしろこれらの「なかなか」の用法は連続線上にあると見るのが現象の素直な捉え方であろう。<sup>5)</sup>

- (17) 社会の意識や制度はなかなか変わらない。  
(18) 社会の意識や制度はなかなか変わりにくい。  
(19) 社会の意識や制度はなかなか {変えるのが難しい・変わるのに時間がかかる}。

さらには、次のような例も、「読むのが容易でない」、「負かすのが容易でない」と考えれば、上の例につながる。(17)-(18)-(19)-(20),(21)の順に、よりA用法の典型に近いものからよりB用法の典型に近いものへと序列化できるものと考えられる。

(20) この本はなかなか難しい。

(21) 敵はなかなか手強い。

要するに、A用法とB用法は典型的には区別が可能であっても、互いに連続する部分を持つものであり、事態成立の困難さを表す述語などの場合が、中間領域に当たる。

## 2 分析

### 2. 1

冒頭で述べたように、本稿の主たる関心はB用法にあり、A用法について述べるべきことは少ない。A用法について飛田・浅田(1994)に「物事の解決や目標の達成を期待する暗示がある」とある。実際、通常、「なかなかP'ない」は、P'の成立が望ましいと考えられる文脈で用いられる。「なかなか死なない」といった言い方が不適切とみなされやすいのは、死を期待する含みが生じるからであろう。<sup>6)</sup>

### 2. 2

本節では、B用法での「なかなか」によって限定される述語に課される制約について考えることにする。筆者はB用法での「なかなか」の基本的な意味特徴を(2)のように考える。

飛田・浅田(1994)には、「なかなか」は「程度が平均を上回っている様子を表す」とあるが、例えば学生の能力に関して「あの学生はなかなかできる」と言う場合、普通は、単に平均を上回るできばえを意図してはいない。ただ平均を上回る程度ならば「まあまあできる、割とできる」といったところではないか。むしろ、この例でいえば、「軽視しがたい程のできばえ、見くびれないほどのできばえ」を意味するのが「なかなか」である。

ここでいうB用法において、Pになる要素の種類には制約があることを森田氏も指摘しておられる。上に述べた意味特性から、自ずと生じる制約であると思われる。例えば次のような、自然度の相違が観察される。このような共起制限の問題につい

て以下詳しく論じる。

(22) あの岩はなかなか {大きい・?小さい}。

(23) この犬はなかなか {利口だ・?馬鹿だ}

(24) なかなかがんばる。

(25) なかなかてこずらせる。

(26) ?なかなか走る。

「なかなか」と共起しやすい述語というのは、およそ、1 語彙的に肯定的な評価を含む（その属性を有することが望ましいとみなされる）述語、または、文脈などから臨時に肯定的に評価される述語、2 良い悪いには必ずしも関係しないが、知覚される、対象や事象の存在感の大きさにかかわる述語、の二種類であると言える（両者が重なる部分もある）。「見くびれない程度にPである」という評価を下すためには、Pという尺度によって計られる大きさを正の値として捉える構えが話者の心理に存在しなければならないところから生じる制限と考えられる。

まず1について述べる。「上手だ、面白い、親切だ、丈夫だ、使いやすい、美人だ、利口だ」などのように、語彙的に肯定的（望ましい）評価を含むものは、「なかなか」と共起する。（逆にこうした述語は「どうも」・<sup>7)</sup>、「今一つ」といった表現と共起にくい）。

これらと対比的に、「下手だ、つまらない、不親切だ、ひ弱だ、使いにくい、ばかばかしい」のように否定的な評価を含む述語（多くは肯定的な述語と反義対をなす）は、（皮肉などは別として）普通の文脈では「なかなか」と共起しない。

また、例えば、「軽い」、「安い」が望ましいことかどうかは、対象の種類や話者の観点、文脈状況によって異なるのでそれ自体が肯定的な意味を持つとは言えないが、例えば次のようには言える。

(27) この登山靴はなかなか軽い。

(28) この店はなかなか安い。

この場合は、「軽い」、「安い」が肯定的に捉えられている。つまり、「靴は軽い方がよい」、「店は安い方がよい」という意識が背後に存在する。(24)の「がんばる」なども望ましいことと捉えられやすい。このように、文脈から臨時に望ましいと捉えられる述語は「なかなか」と共起する。

語彙的であるか文脈状況によるものであるかを問わず、望ましいとみなされる属性の大きさは心理的に正の値とみなされ「なかなか」と共起する（およそ望ましいとみなされる属性であれば、対象に関して側面的、非本質的な属性であっても差し支えない）。

次に2について述べる。これは1の場合よりやや定義が難しい。最初に、尺度的な述語における有標性ということを考えよう。Givón (1978) は、自然言語では尺度

性を有する反義対に関して有標(marked)と無標(unmarked)の対立が見られることを指摘し、"the positive - or unmarked - member of each pair is perceptually more prominent"と述べその根拠をあげている。英語での例は(29)に見られる。

(29) Givón(1978)より

| Positive | Negative | Perceptual property                         |
|----------|----------|---------------------------------------------|
| big      | small    | ease of visual perception                   |
| long     | short    | ease of visual perception                   |
| tall     | short    | ease of visual perception                   |
| wide     | narrow   | ease of visual perception                   |
| fat      | thin     | ease of visual perception                   |
| high     | low      | ease of visual perception                   |
| light    | dark     | ease of visual perception                   |
| fast     | slow     | ease of visual perception of rate of change |
| loud     | quiet    | ease of auditory perception                 |
| sharp    | dull     | ease of tactile perception                  |
| thick    | thin     | ease of visual perception                   |
| hot      | cold     | ease of temperature perception              |
| heavy    | light    | ease of tactile/weight perception           |

これらの全てが日本語にあてはまるわけではないが、「大きいー小さい、強いー弱い、重いー軽い、長いー短い」といった述語の対において前者が無標的であるとみなせることは、村木(1987)、服部(1993)などにおいて述べられている。(30)、(31)のような自然度の相違がその一根拠となる。<sup>\*8)</sup>無標的な要素は、何らかの意味で、知覚される存在感の大きさにつながる要素であり、心理的な正方向を反映したものと考えることもできる。

(30) {大きさ・?小ささ}はどのくらいか?

(31) これはあまり{大きくない・?小さくない}。(服部(1993)参照)

これらの対では、前者つまり無標的な要素は「なかなか」と共起しやすい。

(32) あの岩はなかなか大きいですね。

(33) この荷物、なかなか重いですね。

例えば(33)は、重い方が望ましくとも、軽い方が望ましくとも、あるいは特にどちらが望ましいということがなくとも用いられる。このように、無標的な要素は、それが望ましいと捉えられるか否かに関係なく「なかなか」と共起しやすい。<sup>\*9)</sup>

一方、有標的な要素では、それが肯定的に評価されることが「なかなか」による

限定を受けるための条件となる。(34)のように言えるのであれば、小さいことが価値を持つような対象を問題にする場合などであろう。つまり1に該当する場合である。

(34) これはなかなか小さい。

同様、「(値段が)なかなか高い」、「なかなか難しい」は、高い(難しい)ことが望ましいか否かに関係なく用いられるのに対し、「(値段が)なかなか安い」、「なかなか簡単だ」が用いられるのは、安い(簡単な)ことに価値が認められる場合に限られる。

以上に述べた限りでは、「なかなか」の共起制限は「あまり～ない」のそれに近いように感じられる(詳しくは服部(1993,1994)を参照のこと)。しかしながら、実は「なかなか」と共起する述語は「あまり～ない」の場合より制約されている。

B用法の「見くびれない程度」という意味特徴から、次のように、対象そのものの存在感などにあまり結び付かぬ、いわば「取るにたらぬ」属性とは、「なかなか」が共起しにくい。

(35) この板はなかなか{?ざらざらしている・?茶色い}。

もっとも、「なかなか」と共起しうる述語を余す所なく規定することは難しいが、共起しやすい述語をある程度特徴づけることは可能である。「がんこだ、手強い、ややこしい、厳しい、やっかいだ、うるさい(性格)、理屈を言う」などといった述語は「なかなか」とよく共起する。これらは、対象の存在を実感させるような、手応えというか抵抗感の大きさを表すものである。また、一面では「扱うのが容易でない、一筋縄で行かない」という意味合いを持つことから、A用法につながるとも言える。

次のような例も、気象状態の、体感される手応えの大きさを表す。

(36) なかなか暑い。(入江)

(37) なかなか寒い。(入江)

また次のような例も、対象の一種の存在感の大きさを示すものと言えよう。

(38) なかなか派手な宣伝。

(39) なかなかリアルな話。

なお、B用法の「なかなか」は、何かの外的対象や状況への程度評価という特質を持ち、話者の主観的な情意そのものを限定することは難しいようである。<sup>\*10)</sup>

(40) ?今日はなかなかうれしい。

### 3 「なかなか」と「結構」

「なかなか」に比較的類似した意味特徴を有する副詞に「結構」がある。

「結構」は、概略「予想された(通常小さい)程度を基準とすれば、小さいとは

言えない程度」を表すと考えられる。渡辺（1987）には、「結構」が「優性の評価」を受ける述語と共起する旨の指摘があり、これは、本稿で述べた「なかなか」の共起制限と共通の側面を有する（もっとも、渡辺氏も指摘されるように、「結構」の共起する述語の範囲については、話者の年代などによる変異も考えられ、なお明らかでない点がある）。ただし、筆者の語感では「この板は結構ざらざらしている」等は別に不自然ではなく、「なかなか」に比べれば共起する述語の範囲は広い。

さて、「なかなか」は「予想以上（予期した以上）」の程度を意味するとする記述が辞書類などに多く見られる（例えば『大辞林』、『使い方の分かる類語例解辞典』）。この点について検討してみよう。

なるほど、もともと「見くびれない程度にPである」ことがはっきり知られていた状況でわざわざ「なかなか」を用いて「見くびれない程度にPである」と断定するのはごく普通の談話では無意味なことである。しかし「見くびれない程度にPである」と知られていなかったということと、「見くびれる（低い）程度にPである」と予想されていたということとは異なる。

(41) 結構絵がお上手ですね。

(42) なかなか絵がお上手ですね。

上例を比較すると、(41)は相手の絵の下手さの予想を通常含意するが、(42)は必ずしもそうではない。相手の絵の腕前に関して何らの予想がなかった、いわば白紙の状況でも使用しうる。つまり、「なかなかP」は、必ずしもPの程度の低さの予想を含意するものではない。(41)のように言われたなら単純に喜ぶことはできず、場合によっては失礼な発言と受け止められかねないだろう。もっとも、(42)の発言も、相手によっては、失礼に感じられる場合があるかもしれないが、それは、「見くびりうる程度のPであるか否か」という問題意識を持つ事の不適切性によるのであって、下手さの予想から生じるものではない。<sup>・11)</sup>

無論、「なかなかP」が、実際Pの低さが予想される状況で用いられることは少なくない。「ああ見えてなかなか～」、「あれでなかなか～」などといった言い方などはこの典型例であるといえる。二例あげる。

(43) ごらんのとおり身装をかまわない子だがね。こう見えてなかなか頭はいいのだよ。(宮尾)

(44) あなたもなかなかやるな。

#### 4 結論

本稿では、副詞「なかなか」の、特に程度限定の用法に関して、その特性、使用条件を記述し、程度表現における尺度方向性との密接な関連を指摘した。通時的な

考察は一切省略したが、恐らく、ここで述べたような形でのB用法での「なかなか」の共起制限が生じたのは比較的近年のことであろうと想像され、それが生じるに至った事情の解明が望まれる。また、共時的な記述に限っても、まだ不十分な点も多く、程度を限定する語類全体の中での位置づけなども当然考えるべき問題であるが、すべて今後の課題として筆をおく。

\* 注

\*1) それぞれ陳述副詞、程度副詞としての用法であるといった見方を支持するものではない。

\*2) 文末にナイ、マイ、ズを有する文を指す。他に、反語の文においてA用法が生ずる可能性がある。下記は古い例で現代語の用例としての適切性が疑われるが、参考迄にあげる。

(45) どうしてそんなこと言たって中々聞くものですか。(夏目漱石『吾輩は猫である』)

\*3) 広義の程度性に関する議論については、服部(1993,1994)などを参照されたい。形容詞(例:難しい)、形容動詞(大変だ)、動詞(がんばる)、などを含む。また、「なかなか上手に書いた」のように「なかなか」が直接には、程度性を有する副詞類を限定することも可能である。

\*4) まれに「なかなかに」の形をとることがある。

(46) なかなかにむずかしい注文で、カメラはベテランのSが選ばれた。(池波

\*5) ここでいうA用法とB用法の間の意味特徴の共通点に、より強く着目する見解として、上に述べた森田氏の記述がある。その要点を以下に示す。

(47) 「【「なかなか」には】“かんたんにはそのような状態に達しない”という意識がある。【中略】それが、【以下】などのような例に分化する」

1 あまり例を見ないほど際立った状態

なかなかしゃれたネクタイ

2 予想を超える高い程度

なかなか迫力があるね

3 実現実行の困難さ

なかなかむずかしい

硬くてなかなか噛めない

なかなか手に入らぬ品

4 実現までに時間がかかる様子

バスはなかなか来ない

なかなか雨が降って来ない      以上、森田（1989）より

およそ森田氏の用法1と2は筆者のB用法に当たり、3は中間的領域を含み、4はA用法に当たるものと考えられる。

筆者のいうAB両用法の共通点を「”かんたんにはそのような状態に達しない”という意識がある」という形で抽象化して、これを「なかなか」の意義特徴であると考えことは可能であるかもしれないが、そこから直ちにA用法、B用法の使用条件が演繹されるわけではない。例えば、B用法の場合、「”（被害状況が）かんたんにはこれほどのひどさには達しない”という意識を背景にして発話したとしても、「被害状況はなかなかひどい」という文は不自然なように思われる。このような使用上の制約条件は結局B用法に固有の特性として記述しなければならないから、何らかのレベルではA用法とB用法の区別を行わなければならない。

また、「”かんたんにはそのような状態に達しない”という意識」と、「なかなか～」の表す事柄との関係が、A用法とB用法とでは異なっている点にも注目しなければならない。つまり、「このネクタイはなかなか売れない」では、「このネクタイはかんたんにそのような状態に達しない」ということは、まさにこの文の発話により断定されるところ（の少なくとも一部）に他ならない。ここで、「そのような状態」とは、述語「売れない」の否定である「売れる（売れた）」状態である。しかるに、「このネクタイはなかなかしゃれている」という文の発話は「このネクタイはかんたんにはこのようなしゃれていない（述語「しゃれた」の否定）状態に達しない」ということを断定するのではない。かといって、「このネクタイはかんたんにはこのようなしゃれた状態に達しない」ということを断定するとも言えない。むしろ一般的なネクタイの洒落度合の分布状況等を背景にして、このネクタイの度合を評価すると言える。（もっとも、先に述べた「なかなか変えにくい」といった例はこうした点でも中間的な性質を持つ）。

以上の2点からも、やはり典型的にはA用法とB用法の区分を設ける事が、意味記述の手順として生産的なように思われる。

\*6) ただ、厳密には常にP'の成立が望ましいと考えられるわけではない。例えば(47)では、文脈から見て、「止まる」ことが望ましいとみなされているとは必ずしも言えない。この点で、期待という語を用いることには問題が残る。

(48) 共通1次が始まった当時、大学行政に通じた文部省の幹部が自信ありげにこう言った。「大学というところは、走り出すまでは時間がかかるが、一度動き出せばなかなか止まらない。今度の入試は国大協主導ですから長続きしますよ」（朝日88.1.22）

\*7) 次のように推量判断を行なう場合は別である。

(49) （会ったことはないが、評判から考えると）どうも彼女は美人だ。

\*8) 「大小、長短」といった対語での順序もこうした無標性を反映する。ただし「軽重」(×重軽)などはこの例外となる。

\*9) もっとも、(物理的な対象に関して)「なかなか大きい」に比べると「なかなか長い」と言える状況はやや限定される。「長い」は「大きい」に比べ一面的な属性だからであろうか。

\*10) この点では「なかなか」は、渡辺実氏の「結構類」(渡辺(1987))および、「かなり」、「相当」などと共通の性質を持つ。この点は佐野由紀子も指摘している(同志社女子大学1993年度卒業論文『程度副詞の共起制限について』)。ただし「今日はなかなか気分がいい」とは言える。「気分」という対象が存在するからであろう。

\*11) 飛田・浅田(1994)に、「なかなか」は「程度が平均を上回っていることを上から見て評価する暗示があり、目上に向かって用いる場合には注意を要する」とあり、「部長はゴルフがなかなかお上手ですね。(もっとうまい自分が見て見所があると思う)」という例示があるのは、この点を述べたものかと思われる。もっとも、上の発話が必ず「もっとうまい自分が見て」という含みをもたらしわけではない。下手な者でも他者の上手さを軽視出来ない程度であると評価することはできる。

なお、絵の大家に(42)のように言えば明らかに失礼であるが、その場合は「なかなか」を用いず単に「絵がお上手ですね」と言ったとしても失礼と思われる。

#### \* 用例の出典

池波正太郎 食卓のつぶやき(朝日文庫)、伊ッセー尾形の人生カタログ(朝日文庫)、入江相政日記(朝日文庫)、内田春菊 もんもんシティー(文春文庫)、奥井一満 タコはいかにしてタコになったか(光文社)、筒井康隆 あるいは酒でいっぱい(集英社)、宮尾登美子 クレオパトラ(朝日新聞連載)、徳川夢声の問答有用(朝日文庫)、朝日新聞の記事(CD-H I A S K'88-'93、日外アソシエーツ)、毎日新聞の記事(CD-毎日新聞'93、日外アソシエーツ)

#### \* 参考文献

浅野百合子(1984)「程度副詞の分析—ずいぶん・だいふ・なかなか・相当・かなり—」『日本語教育』 40

塚原鉄雄(1955) 「『なかなか』の史的展開」『大阪市立大学国語学研究冊子』第三冊

塚原鉄雄(1954) 「『なかなかに』から『なかなか』へ」『大阪市立大学国語学

研究冊子』第一冊

Givón, Talmy (1979) "On Understanding Grammar", Academic Press.

服部匡 (1993) 「副詞『あまり(あんまり)』についてー弱否定および過度を表す用法の分析ー」 『同志社女子大学学術研究年報』 44-IV

服部匡 (1994) 「アマリ～ナイとサホド(ソレホド)～ナイ」 『同志社女子大学日本語日本文学』 6

服部匡 (1995) 「『どころか(どころではない)』について(仮題)」 『同志社大学日本語日本文学』 7 (予定)

飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』 東京堂出版

村木新次郎 (1987) 「対義語の輪郭と条件」 『日本語学』 6-6

森田良行 (1977=1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店

渡辺実 (1987) 「程度副詞の体系」 『上智大学国文学科紀要』 4

(はっとり ただし、同志社女子大学)

## A semantic analysis of the adverb 'nakanaka'

Tadasu Hattori

This paper aims at explicating the basic semantic properties of the adverb 'nakanaka' and the selectional/pragmatic restrictions deriving from them.

Uses of 'Nakanaka' can be classified into two types (partly overlapping each other), namely, (i) as a modifier to a predicate taking a negative ending, and (ii) as a modifier to a gradable predicate.

In the usage (ii) nakanaka has a peculiar co-occurrence restriction to the predicate it modifies, which is correlated to the marked/unmarked oppositions observed in scalar predicates.